日常的な主観性としての「私」の解明

―M・シェーラー『宇宙における人間の地位』の読解を通じて―

藤井龍定

〈はじめに〉

本論文は、マックス・シェーラー（一八七四～一九二八）が生涯をかけてその確立を目指したが突然の死によって果たされなかったところの「哲学的人間学」の核心の一端を、彼の『宇宙における人間の地位』（"DIE STELLUNG DES MENSCHEN IM KOSMOS" 1928：以下『宇宙』と表記）の読解を通じて明らかにしたい、という動機から書かれた一論考である。西洋の人間観は古くはギリシャにおける理性的動物という理解から始まり、キリスト教では神の被造物でありながらその中で支配的地位を与えられた存在でもあった。しかし現代において生物学や心理学が発達すると人間も単なる動物の一種に過ぎないとされるに至るが、その中でも知能の発達した高等動物なのか、あるいは身体的には劣等でありながらそれを補うために過度に脳髄だけが発達したずる賢い動物なのか、といった様々な人間観が登場するのである。その様な分裂状態の人間観を再度統一的に把握しようとしたのがシェーラーの哲学的人間学という試みである。それ故この著作は小著とは言え、その内容は多岐にわた

っており様々なアプローチが可能であるが、私は日常性という観点からの解釈を試みたい。現代に生きる我々は古い人間観からは解放されて科学的な中立的解釈を手に入れたかの様に考えているが、しかし世界における宗教事情などに目をやるなら古代からの人間観はいまだに日常に強力な影響力を保ち続けていることは明らかである。従って現在でも、否、現在ほど我々の「人間」という概念が不確かになったことはないであろう。しかし人間とはそういう複雑怪奇な存在であって、人間の一義的定義など無意味だという指摘は当然予想される。しかしシェーラーの哲学的人間学の主眼は単なる人間観の統一的定義にあるのではなく、様々な人間観を検討することによって現象してくるところの人間世界あるいは宇宙との本来の関係性を浮かび上がらせようとするものである、というのが私のシェーラー解釈である。

今回の論文では分量も限られていることから『宇宙』について包括的に取り上げることは出来ない。従って哲学的人間学の大きな特徴でもある生物学の業績の検討を通じて、植物や動物などとの比較から人間における〈私〉という自我が如何に成立しうるかを探求してみようと考える。〈私〉という自我は仏教でも重要課題であるが、生物学からの研究は〈私〉を考える上での貴重な資料を提供してくれ、また人間観にも一つのモデルを提示してくれるものと考える。

第一節　生の段階的構造

日々の日常生活を体験しているのは〈私〉（特に「日常的主観性」と名付けて良い）である。私という人間がこの論文を書いているのであり、私という人間が食事をし、眠り、喜び、苦しむ。他人と会話しているのも私であり、人生とは私という人間の人生以外の何物でもない。当然この世界には私以外の他者と呼ばれる存在者も同

時に存在して私と全く別の人生を歩んでいる。当然他者の人生を体験することは出来ないが、その他者が生きては死んでいくのを体験するのも〈私〉の人生なのである。この日常的主観性がこの様な日常を体験しているわけだが、では人間がその日常体験の総体として出会う世界とはいかなる構造をしているのかを考察してみる。

人間的な日常世界である限り、一番身近に出会われるのは同じ人間としての他人であるが、同時に人間以外の生きものや様々な財物に囲まれている事もそれに劣らず身近であり、日常世界の構成を概観するためにまずは人間以外のものに焦点を向けることが肝要かと思われる。それは我々人間とは外見的にも内面的にも明らかに異質と思われる存在者との出会いであって、栄養摂取や生命の維持という観点からするならより重要であり、これらすべてが相当な密度でもって人間的日常世界を埋め尽くしているのである。『宇宙』の記述に求めるなら、シェーラーはそれらを無機物、植物、動物そして人間という四つの存在形式に分類する。これらが渾然一体となって人間的日常世界を形成しているのであり、これらの様々な組み合わせによる多種多様な出来事を日常的主観性が経験するのだと言えよう。シェーラーはこれら四つの存在形式を無機物から人間を順に、低次から高次として規定する。つまり概観するなら人間的日常世界は、最も低次な無機物、そして植物、動物、人間という四段階の階層構造を成している。しかし無機物以外つまり植物・動物・人間は生命体であり有機的（organisch）であるが、一方無機物は非―有機的（an-organisch）である、という点で決定的に区別する必要がある。

まず無機物についてシェーラーの記述に従うなら、無機物にはそれに存在的に所属するような中心というものがない。無機的世界は大地などのマクロな世界から、分子・原子・電子というミクロな世界にまで及んでいるが、無機的物体というのは形而上学的な力あるいはエネルギーの現実的具象化であると言える。存在形式の四段階構造に関しても、その依存度という点で圧倒的に高次が低次に、つまり生命体が無機物に依存するのである。無機

物は極めて誇り高き独立性の内に独自の法則性を有しており、我々が生きている世界における力あるいは作用の流れは、高次から低次ではなく、低次から高次なのであるとシェーラーは言う。つまり植物、動物、人間というすべての生命体が生命体として一定の時間的延長の内に生き続ける事が出来るのは、まさしくこの無機物の力あるいはエネルギーに負っているのである。

それに対し生命体とは、無機物の根源的力を取り込んでエネルギーとして活用しながら、それを組織化することによって個体化し、おのれ自身が活気に満ちた活動力を手に入れた者、との解釈が提示されよう。しかしここで注意すべき点は、生命体を定義付ける言葉は lebendig（生き生きした、活気に満ちた）であってLebenではないという事である。つまり「生：Leben」は無機物を含めた総体である。なぜなら生命体に根源的な力を与えているのが無機物であって、無機物がなければ生命体はおのれ自身の身体をも維持出来ないからである。それ故生命体は生の世界におけるある特殊な存在様式に過ぎない。

lebendigと内容的に一致するものとしてシェーラーはさらにpsychisch（心的な）という言葉を使う。このIndividualität「心的な」という言葉の意味を理解するために重要となるのがIndividualität「個体性」という言葉である。生命体は存在的中心であり、常に自らおのれの空間的・時間的統一と個体性を形成するのである。つまり生命体とは「おのれ自身でおのれ自身を限界付けるX」なのである。個体性あるいは個体化は、空間的ならびに時間的な閉鎖性の度合いによって異なり、植物は動物に比べてその度合いは小さいとされる。いずれにせよ生命体というのは個体性を伴って初めて現象することが出来るのである。

シェーラーによるとこの心的側面も四つの段階に区別することが出来る。その心的段階を低次から高次の順に挙げると、「感情衝迫」「本能」「連合的記憶」「実践的知能」の四段階である。生命体には植物、動物、人間とい

う三種の存在形式があることは先に見たが、これらすべてが四つの心的現象を有しているわけではなく、その個体化される際の有機的度合い（つまり組織化の度合い）によって、いずれの心的現象を有するか又は優勢であるかが決まる。

まず最も低次な感情衝迫であるが、これはすべての生命体に共通して認められる現象であり、生命体が生命体としてあらゆる自己運動をするための動力源である。これには単なる「～へ向かって」と「～から遠ざかって」という目的対象を欠いた二つの根源的方向性しかない。つまり感情衝迫というのは、無機物が内包する力が生命体において取り込まれ、それがもっとも単純な二方向に組織化されたエネルギーであると考えてよい。この感情衝迫が最も顕著に見られるのが植物であり、従って植物を観察する事によって生の本質が垣間見られる。シェーラーによるとそれによって明らかとなる生の本質はニーチェの言うように「力への意志」ではなく、生殖と死への衝迫であるとされる。つまり生の本質は、おのれの生の拡張・強化にあるのではなく、生命の営みを次の世代に引き継いで死んでいくというあり方である。確かに単に生殖と言っても、自然界において植物も動物も自分の遺伝子を残すための競争があることは認められるが、それはあくまで個体あるいは種の間で繰り広げられるもので、生という大きな営みの視点から見れば、そこには単なる生命の継続と単なる死、生まれては死んでいくという単純なる現象があるだけなのである。

心的側面の第二段階は「本能」である。これは様々な内的器官などが分化し、身体の形態学的な組織化も複雑になってくる動物において初めて認められる。この本能に関してシェーラーは四点の特徴「意味に適っている」「固定的で一定不変なリズム」「種に対して適合的」「試行の回数には依存しない」を挙げているが、その中で特に本能を特徴付けているのが「種適合的」という機能である。従って本能的行為は、完全に種ごとに典型化され

た反応である。生命体は特定の種として生まれれば、その種に組み込まれた本能に従って生きていくことが運命づけられているのである。

しかし動物は更に有機化の度合いが増大するにつれて、ただ種に束縛されるのではなく、「個体」としての自律性が顕著に現れるようになる。それを特徴づける行為に二種あり、一つは「習慣に適った」行為であり、もう一つは「知的な」行為であり、両者ともに本能的行為から派生したものである。前者は心的現象の「連合的記憶」に、後者は「実践的知能」にそれぞれ相当する。生命体と個体化とは不可分であることは先に確認したが、感情衝迫も本能も個体に対して持つ意味は非常に小さいものであった。我々は一本の木として個体としての植物を見ることが出来る。しかし植物的個体は動物的個体とは異なり感覚的情報を還帰的に統合する中心というものを欠き、また生殖においても鳥や虫や風の助けを必要としており、それ故に個体とは言え極めて種的な生の方向性のみを体現している。それは外へ外へと向けられた方向性である。しかし動物になると還帰的中心の存在によって、生の方向性は逆に内へ内へと向けられることになり、これが個体化をより鮮明にすることにつながる。しかし生の本質的方向性としてはやはりこれは逆向きであって、その意味で個体化というのはその維持のための執着という苦悩を背負い込むことを意味するのである。

動物において初めて連合的記憶と実践的知能が認められるのであるが、それは本能からの解放を意味する。それは完全に種に対して否定的なのではなく、固定的で不変な生得的特徴に頼る度合いが小さいのである。種の個体として経験するのだが、種よりも一個体にとってより適切と思われる行為によって対処するあり方である、と言えよう。

まず連合的記憶（パブロフによる犬の唾液分泌の条件反射実験のように、何度も繰り返されることによってそ

の行為が習得されると言う意味で「連合的記憶」と言われる）であるが、これは生適合的かつ巧妙な方法によって行為を徐々にではあるが絶えず更新するような生命体にのみ認められるものである。その場合、行為はその都度巧妙になっていくが、その度合いは試行の回数に強く依存している。つまり連合的記憶というのは単なる行為の繰り返しだけで終わるのではなく、その繰り返しによって生命体は一つの個体として生きていく上でより柔軟な行動をとることを可能にするのである。

心的現象の最終段階である実践的知能であるが、最終段階だからといって連合的記憶に付加される形で高等動物において初めて現われるものではなく、両者は同時的に平行しており、それ故高等哺乳動物だけではなく、下等な滴虫類においてもすでに認められる、とシェーラーは言う。むしろ言える事は、連合的記憶によって生命体は種の束縛から解放され、有機的個体としての自立を獲得したのであるが、連合的記憶が進行するにつれてそれまで種に対してのみ奉仕していた衝動や感情や情動もまた本能から解放され、それだけで独立してますます快の源泉になる危険が伴ってしまったのである。これに対して自然が同時に準備しておいたものが実践的知能なのである。この実践的知能が連合的記憶と異なるのは、新しい経験に対して生に適合的で有益な行動を、試行の回数に全く依存することなく取りうるという点である。それ故これは直面する状況に応じて個体が選択的行動を取り得ることを示している。ここで確認しておくべき事は、実践的知能の最終目的は個体が生命的衝動を満足することであり、それ故実践的知能は「未だに有機的に関連づけられている実践的知能」とされ、この点ではやはり本能の支配下にあるのであり、それこそが実践的という言葉が意味するところである。しかし連合的記憶と比較するならば実践的知能はより柔軟性に富んでいる。これは種にも個体にも新しい状況を理解する事であり、ひらめきの体験である。シェーラーはここでW・ケーラーがチンパンジーに対して行った実験を引用する。それによる

と、披験チンパンジーは檻の外に置かれた餌を引き寄せるために檻の中の毛布や棒を使用するというのである。それが意味するところは、チンパンジーにとって「寝るための物」「遊ぶための物」であった事物が、「餌を引き寄せるための物」という抽象的・力動的性格を手に入れた、という事である。つまり「道具」の発見である。また棒を使えば餌を引き寄せられるという一連の動作は、原因―結果の因果性が垣間見られ、これはある意味で時間概念の誕生とも言える。しかしそれはあくまでも環境世界の内部にある諸事物に基づいているところの現象であって、人間における科学的な時間概念とは区別するべきであろう。だがこの様な知能的行動が可能となるのは、やはり連合的記憶と同様に、神経系の統一的構造に基づいた衝動的中心を動物が獲得したからであると言える。さて以上の考察から動物にも知能があることが認められた。ではこれらの事実を認めたとしても、なお独自な能力と特殊地位を人間は有していると言えるのか、というのがシェーラーの最大の関心事であった。

第二節　日常的主観性

前節で生命体の本質的特徴は個体化にあり、植物より動物はその度合いが大きく、より種的本能から解放された個体的性格を獲得した事を確認した。それ故実践的知能が最も高度に発達した人間は、もっとも柔軟性に富んだ個体性を有する生命体であると言え、それ故にまた最も個体性を強く意識するに至った生命体であると言えるのである。なぜなら実践的知能がもっとも大きな役割を果たすということは、種よりも個体にとってより有利な行動を選択することになる、と考えられるからである。では我々人間の日常世界は、程度の差は非常に大きいとしても無機物や植物・動物と共有する範囲でのみ営まれているのであろうか。シェーラーの言葉を引用するならば、賢いチンパンジーが道具を用いる事と、エジソンが様々な機械を発明する事は、たとえその差がいかに大き

くとも、ただ程度の差でしかないのだろうか、という問いが生じうるであろう。確かに人間は他の生命体と多くの共通点を有して日々の生活を営んでいるのだが、そこでは別段意識されることはない人間の独自性がすでに存在しているのだ、とシェーラーは考えているようである。それこそ他の存在者との共有世界のすべてを把握・認識するのに「対象化」という作用を媒介している、そういう人間のあり方である。それに対して、動物は対象を持たない、とシェーラーは言う。では生世界を把握する仕方が具体的に動物と人間とではどの様に異なるのかをシェーラーの記述から確認する。

動物の場合、あらゆる行動や反応は神経組織の生理学的状態から発動されるのであるが、その生理学的状態を規定しているのが第一節で見たところの心的側面である。動物は生世界からの刺激を抵抗として感受するが、それによっておのれの生理学的・心的状態が好意的あるいは嫌悪的に揺り動かされることによって、その動物の行動が第一に決定されることになるのである。つまり動物の行動は、種に典型的な状態性によって根本的に方向付けられているのである。ここで重要となるのは、動物においてはその内的世界と外的世界が適切な関係において閉鎖的連関構造を成している、という事である。この様な閉鎖的連関構造を成した生世界を特に環境世界(Umwelt)とシェーラーは言うが、つまり動物はすでに種に属する個体としての心的側面を有しており、従ってその種独自の環境世界の中でのみ閉鎖的に生息しているのである。それ故環境世界が変化すれば、それに適合するように動物の心的状態も変化し、その関係はまさに充足と呼べるものなのである。動物は環境世界で与えられていない物を追い求めることはしない。そして動物は環境世界構造という安全な柵と境界線の内部で生活し、その内部の物のみを意識し享受する。これは何も動物の生活は他の動物に襲われることなく安全で食料も十分にあるという意味ではなく、一定の環境世界が維持されている限り(何らかの要因で急激に変化しない限り)種の維

持は保証されているという事である。個体としては危険に満ちた世界でも、種としてはそのバランスは保たれているのである。

しかし動物の充足に対して人間の場合は空虚だとシェーラーは言う。ここでシェーラーが人間独自の生世界認識として認めているところの「対象化」という事態を詳細に検討しなければならない。

生世界からの外的刺激を心的状態において感受するという機能は人間も有しており、その抵抗における刺激は生命体として種あるいは個体にとって望ましいか望ましくないかによって、好意的あるいは嫌悪的に感受することになる。しかし人間はこの抵抗を「対象」にまで高め、外的対象事物の相存在（今―ここに―この様にある、というあり方）を原理的に理解するに至るのである。では人間における純粋な相存在の把捉とは如何なる事態なのか。それは動物とは違う人間独自の時間・空間概念に基づいている。その人間独自の時間・空間概念をシェーラーは「空虚な形式」と言う。まず「空虚」という言葉についてシェーラーは、おのれの衝迫不満足が衝迫満足を超過し絶えず過剰である事態であり、衝迫的期待の恒常的不充足状態であると定義する。簡単に言えば「常に何かを求めながらも満たされない、空しい心」である。我々は〈動きたい〉〈動こう〉という根源的欲求を持つが、人間はおのれの有機的衝動や欲求をも対象化する。対象化された欲求は、生世界におけるすべてのものに適用され、それらが運動しようという可能性という観点でネットワーク化されるようになる。つまり世界のすべてに自分と同じ空虚な状態を当てはめるのである。それによって先程の行動と結果という因果性による時間概念、あるいはそれに伴う空間概念も世界のすべてに適用される。それが構造的に確立したならば、そのような時間・空間概念は、生世界のあらゆる事物を理解し秩序づけるための座標軸となるのであり、ここにおいて時間・空間は有機的なものから独立した普遍なる空虚な形式となるのである。科学はこの様な座標軸としての時間・空間が

成立して初めて可能となる。そしてこの形式は世界が消滅してもなお存続し続ける「永遠なる空虚」と見なされるに至るのである。

以上から人間は有機的事物から切り離された普遍的時間・空間軸において生世界を認識すると言えるのであり、これが周囲の事物を「対象」として純粋な相存在の内に原理的に認識する、という事態である。しかしここにおいて極めて重大な前提を我々は想い起こさなければならない。それは、外的事物に対してだけではなく、おのれの有機的個体の内部、衝動が発せられる中心をも対象化してしまっている、という前提である。実際我々は常に自分自身の生理的状態を気にかけ、体調が良いとか悪いとかを認識する事が出来るし、何よりも〈生きている〉という事を常に意識することが出来ているのである。それはこの衝動中心という個体性全体を対象化しているためである。これによって人間において〈私〉の意識が芽生えることになる。

ここに至って人間に「自己意識」が目覚め、〈私〉という主観性が獲得されたのである。ここで獲得されたのは、単なる「思惟する私」ではなく、生命体として身体をも有している〈私〉である。以上生物学の成果を取り入れたシェーラーの論述を参考に、〈私〉という自我が成立する課程を検証した。それはあくまで植物や動物と同じ生命体としての〈私〉であるが、「対象化する」という人間独自の能力によって成立したものである。ここに人間という存在者の、動物であって動物でないという奇妙な二元性が浮かび上がらざるを得ないのである。今後はこの様な自我が人間の統一的理解に対してどの様な役割を演じるのか、さらには対象化という作用そのものの根拠・由来は何かが課題として残るであろう。

〈使用文献〉

MAX SCHELER
"DIE STELLUNG DES MENSCHEN IM KOSMOS"
(13. verbesserte Auflage 1995)
BOUVIER VERLAG　BONN

『シェーラー著作集』十三巻　白水社